

富山大学 学報

第261号

目 次

関係法令	1	国家公務員等退職手当法の改正	6
学内規則	2	海外渡航者	7
富山大学工学部規則の一部改正	2	学内レクリエーション〈釣大会〉	7
諸会議	3	中国遼寧大学長の来学	8
人事異動	5	寄稿〈ヒマラヤの氷河調査〉	8
学内諸報	5	職員消息	10
附属図書館工学部分館長の改選	5	主要行事	11

関係法令



	(官報掲 載月日)		(官報掲 載月日)
政 令		○無線従事者規則の一部を改正する省令 (郵政67)	7・27
○児童扶養手当法施行令の一部を改正する 政令(236)	7・19	○児童扶養手当証書の様式を定める省令の 一部を改正する省令(厚生・郵政1)	7・29
省 令		規 則	
○外国郵便為替規則の一部を改正する省令 (郵政58)	7・10	○人事院規則9-17(俸給の特別調整額) の一部を改正する規則(人事院9-17- 4)	7・15
○学校基本調査規則及び学校設備調査規則 の一部を改正する省令(文部25)	7・12 (号外)	告 示	
○児童扶養手当法施行規則の一部を改正す る省令(厚生33)	7・24	○郵便法等の規定に基づき郵便番号を定め る件の表の一部を改正する件(郵政533)	7・10
○児童扶養手当及び特別児童扶養手当の支 払に関する規則の一部を改正する省令 (郵政62)	7・27	○本邦と外国郵便為替を交換する国等に関 する件の一部を改正する件(郵政534)	7・10

諸 会 議

昭和60年公開講座第5回委員会（7月3日）**（議 題）**

- (1)昭和60年度公開講座の実施について

第1回入学試験管理委員会専門委員会（7月4日）**（審議事項）**

- (1)昭和61年度入学試験問題の作成について

第2回事務協議会（7月5日）**（議 題）**

- (1)定員減について
(2)勸奨について

第4回大学案内編集委員会（7月6日）**（審議事項）**

- (1)昭和61年度富山大学案内の編集について

第1回保健管理センター運営委員会（7月9日）**（報告事項）**

- (1)昭和59年度業務報告
①昭和59年度定期健康診断実施について
②昭和59年度保健管理センター利用状況について
③昭和59年度学生相談関係利用状況について
④東海・北陸五大学健康増進セミナーについて
⑤健康の集いについて
⑥生活意識調査について

（審議事項）

- (1)昭和60年度業務計画等
(2)X線撮影の外部委託方式への切り替えについて

第2回トリチウム科学センター運営委員会（7月12日）**（審議事項）**

- (1)昭和59年度運営費決算について
(2)昭和60年度運営費予算について

第3回学園ニュース編集委員会（7月15日）**（審議事項）**

- (1)第49号学園ニュースの発行計画について

第3回トリチウム科学センター研究審査専門委員会

（7月16日）（持ち回り）

（報告事項）

- (1)専門委員会の名称変更について

（審議事項）

- (1)昭和60年度学内共同利用申込みの一部追加について

第2回入学者選抜方法研究委員会（7月23日）**（報告事項）**

- (1)富山大学入学者選抜方法研究委員会専門委員について
(2)「国立大学入学者選抜に係る資料の交流に関する申し合せ」について

（審議事項）

- (1)入学者選抜方法の改善に伴う昭和60年度以降の調査研究事項について
(2)昭和62年度の共通第1次学力試験の出題教科について
(3)帰国子女、社会人の受入れについて

第3回相互乗り入れ等検討小委員会（7月24日）**（審議事項）**

- (1)教養部と学部の相互乗り入れについて

第3回部局長懇談会（7月25日）**（懇談事項）**

- (1)学術奨励基金募集について

第6回評議会（7月26日）**（報告事項）**

- (1)教官人事について（工学部）
(2)学生の動向について

（審議事項）

- (1)富山大学工学部規則の一部改正（案）について
(2)昭和62年度の共通第1次学力試験の出題教科等について

第1回トリチウム科学センター将来計画専門委員会

(7月29日)

(審議事項)

(1)委員長の選出について

第3回事務協議会(7月30日)

(議 題)

(1)暖房の開始時期について

第1回レクリエーション委員会(7月31日)

(審議事項)

(1)昭和60年度職員厚生経費の使用計画について

第4回入学者選抜方法研究委員会専門委員会(7月31日)

(議 題)

(1)委員長の選出について

(2)入学者選抜方法の改善に伴う昭和60年度以降(第5期分)の調査研究事項(テーマ)について

(3)今後の方針について

◎ 退庁、退室の際には、戸締りの徹底・電気、ガスの消し忘れ、タバコの吸殻の後始末に十分注意し、盗難の防止・火災の予防に心がけましょう!!

◎ 電気、ガス、水の省エネ・省資源に協力しましょう!!



国家公務員等退職手当法の改正

国家公務員等退職手当法の一部を改正する法律（昭和60年法律第4号）が昭和60年4月1日から施行されました。

今回の改正は、昭和60年3月31日からの定年制度の施行に伴い、定年退職に関連する規定の整備を行ったほか、退職手当の支給率等の改定については、民間企業における退職金の支給の実情及び公務員制度を総合的に見直した結果行われたものです。

改正の概要は次のとおりです。なお、詳細については、各部局担当係までお問合せ下さい。

（改正の概要）

1. 定年制度施行に伴う退職手当の取扱い

職員が定年により退職する場合及び職員が定年に達した日から定年退職日の前日までの間にその者の非違によることなく退職する場合は定年による退職手当が支給される。

2. 退職手当の支給率の改定

(1) 自己都合退職支給率の改定

定年退職支給率との均衡等を考慮し勤続11年以上19年以下については現行より20%引き下げ、勤続25年以上29年以下については勤続年数により3%引き上げられた。

(2) 特に長期の勤続者に係る退職手当支給率の改定

現行法上、一般的に長期勤続者の支給率は勤続年数が長くなるに従って高くなる仕組みとなっており、民間企業においても長期勤続者の退職金について各種の方法により、その累増の抑制又は合理化を図っている実情等をかんがみ勤続31年以上の1年当たりの支給割合が約10%引き下げられた。

なお、経過措置として法律改正後の支給率による退職手当の額がこの改正法律施行の日の前日（昭和60年3月31日）に退職したと仮定した場合の額を下回る場合には、後者の退職手当の額が支給されることとなる。

3. 定年制度施行後における勸奨退職の取扱い

一退職勸奨に関する記録の整備一

定年制度施行後においても、個別的退職勸奨は、人事管理上の要請等から今後とも必要であるので、引き続き残すものとするが、その運用の適正化を図るため、退職手当法上の勸奨退職は、当該勸奨の事実について記録が作成されたものに限ることとする。

4. 定年前早期退職者に係る退職手当の特例

定年から10年を減じた年齢以上（60歳定年の者は50歳以上、63歳定年の者は53歳以上）であり、かつ、勤続期間25年以上である者が、定年前に、勸奨、公務上の死傷病、整理により退職する場合（定年に達する日から6か月以内に退職する場合を除く。）には、次のような特例俸給月額となる。

$$\text{特例俸給月額} = \left(\begin{array}{l} \text{退職日の} \\ \text{俸給月額} \end{array} \right) \times \left[1 + \left(2\% \times \begin{array}{l} \text{定年まで} \\ \text{の残年数} \end{array} \right) \right]$$

5. その他所要の規定の整備

(1) 退職手当の支払規定

退職手当の本人への直接払等に関する規定が新設された。

(2) 退職手当の支給を受ける遺族からの排除

職員を故意に死亡させた者及び職員の死亡によって退職手当の支給を受けることのできる先順位又は同順位の遺族となるべき者を故意に死亡させた者は、退職手当の支給を受ける遺族としない旨の規定が新設された。

(3) 退職手当の返納

退職手当の支給を受けて退職した職員が在職中の刑事事件に関し禁錮以上の刑に処せられた場合には、既に支給された退職手当を返納させることができる旨の規定が新設された。



海外渡航者

渡航の種類	所属	職	氏名	渡航先国	目的	期間
外国出張	教養部	教授	世利 幹雄	ドイツ連邦共和国 連合王国	西ドイツ及び英国の統計制度 史・調査史の研究のため	60. 7. 10 } 60. 9. 9
海外研修旅行	教育学部	"	中川 眸	大韓民国	アジア地区家政学会議及び第 3回韓・日家政学シンポジウ ムに出席のため	60. 7. 17 } 60. 7. 21
	"	助教授	山西 潤一	アメリカ合衆国	第2回国際 Logo 会議出席並 びにマサチューセッツ工科大 学, ニューヨーク大学におけ る研究交流のため	60. 7. 17 } 60. 7. 29
	"	助手	丸山 茂徳	アメリカ合衆国 カナダ	北米西岸造山帯の研究と日米 科学プロポーザルの作成のため	60. 7. 23 } 60. 11. 2
	理学部	教授	小黒 千足	アメリカ合衆国	第10回国際比較内分泌学会に 出席発表及び米国研究者と討 議, 研究連絡のため	60. 7. 19 } 60. 8. 5
	"	助教授	鳴橋 直弘	ノルウェー, スイス, スウェーデン, アメリカ合衆国, デンマーク	第4回国際キイチゴ属とスグ リ属シンポジウムへ参加発表 及び調査研究のため	60. 7. 20 } 60. 8. 22
	"	助手	笹山 雄一	アメリカ合衆国	第10回国際比較内分泌学会に 出席・発表及びカリフォルニ ア大学パークレイ校の研究者 と打合せのため	60. 7. 19 } 60. 8. 5

学内レクリエーション

〈釣大会〉

本学レクリエーション委員会娯楽部会所属の釣班主催による昭和60年度学内釣大会(投げ釣り, 対象魚…シロギス)が, 去る7月20日(土)午後2時から16名の参加者を得て, 新湊漁港防波堤において実施されました。

大会は, 釣り上げた魚のうち最長2匹の合計の長さによって入賞が決定され, 午後5時30分過ぎに終了し

ました。

なお, 成績は次のとおりです。

- | | |
|----|------------|
| 1位 | 二宮英治 (工学部) |
| 2位 | 川崎博幸 (") |
| 3位 | 田中祥男 (本部) |

◎ 構内での自動車等の運転は, 教育・研究に支障を来さないよう安全運転に努め定められた交通方法, 歩行者の安全及び騒音防止に努めましょう!!

中国遼寧大学長の来学

去る7月17日(木)中華人民共和国遼寧大学長馮玉忠氏が来学されました。

馮学長は、事務局大会議室に於て「中国の経済体制の改革について」と題して記念講演をされ、引き続き教育実践研究指導センター、附属図書館、情報処理センターなど学内施設を視察されました。

翌18日(金)は、富山市役所、富山県庁を表敬訪問され、引き続き株式会社不二越、松村記念館を見学され、友好親善の実をあげて、離富されました。



(握手を交わす両大学長)

寄 稿

〈ヒマラヤの氷河調査〉

1949年、ネパールの開国によって、ヒマラヤ登山の黄金時代が開かれた。日本の登山隊は堰を切ってヒマラヤへ向い、氷河に関する数多くの情報を持ち帰った。地質学者・氷河学者による学術調査、日本雪氷学会氷河情報センターによる東ネパール・クンプ地域の氷河予備調査(1973)等も行われて、日本はヒマラヤの氷河に関して最も豊富な情報をもつ国となった。

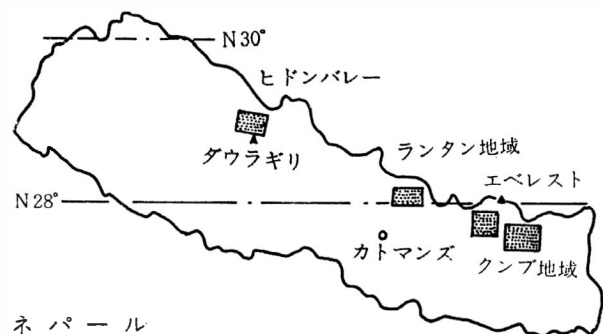
国際的にはIHP(国際水文長期計画)の一環として、地球上に存在する全ての氷河の分布を記録する「氷河台帳」の作成が計画され、氷河の規模、変動、質量収支、熱収支など氷河特性の比較が実施されている。

それらの成果と国際的要請を背景に1974~78年にかけてネパール・ヒマラヤ氷河学術調査(科研海外学術調査、樋口敬二名大教授)が3回実施された。ネパール・ヒマラヤの氷河全域にわたって航空写真1万5千枚がとられ、氷河の分布図と氷河台帳が作られた。またエベレストの登山口に当るクンプ地域の氷河とダウラギリ北部のヒドンバレー地域の氷河が地上から詳しく調べられた。

3年前にはネパール・ヒマラヤの古気候の復元を目指した4回目の氷河学術調査が実施され、クンプ、ヒドンバレーに加えそれらの中間に位置するランタン地域が調査対象に加えられた。この調査には富山大から大学院生の滝川真澄君が参加し、積雪が氷河水に変わ

理学部助教授 對馬勝年

て行く過程を研究するとともに、雪煙りを巻き上げて落下する見事な表層ナグレの写真を持ち帰った。ナグレは雪氷学講座の研究対象とされてきたものなので、その写真はたいへん注目された。



ネパール(東西880km、南北160km)の氷河の特徴は北緯27~30°(沖縄~奄美大島と同緯度)という低緯度にありながら、標高が5,000~8,000mと高いことと、モンスーンによる多量の降雪によって氷河が形成されていることである。

ヒマラヤでは夏の高温によって氷河の下流部は猛烈な融解を生ずる。一般の氷河と異なるのは同じ夏にモンスーンによって、氷河上流部には多量の降雪を生ずることである。モンスーンの影響で南斜面の方により

多く氷河が発達し、急勾配の谷間を埋めるように伸びているのが多い。氷河は6,000~8,000mの高度からはじまり、末端が4,000~5,000mまで伸びていて、南斜面の方が末端高度が低い。

私をはじめ氷河を見たのは、1976年の国際応用雪氷学会議（第1回）の帰路で、ヒマラヤ上空を飛ぶ機内からであった。白い雪原の中から突き出た峰々の間にK2峰を望み、眼下の谷間に沿って流れる氷河に胸躍らせた。急峻な谷間に伸びる氷河の殆んどが岩層に被われ、モレーンやオージャイブ（縞模様）がはっきりと見えた。機内は総立ちとなり、カメラのシャッター音が機内に鳴りひびいたのを思い出す。

今回、その氷河に足を踏み込むことは大きな楽しみであった。私に与えられた氷河調査隊への参加目的はヒマラヤの氷河調査に関わる諸々の手続きを見聞するとともに、フィールドワークの実際の様子を視察し、フィールドワークへの知識と理解を深めること、ならびに実際に氷河上を歩いて研究上の問題点や新しい研究課題を見出すことであった。

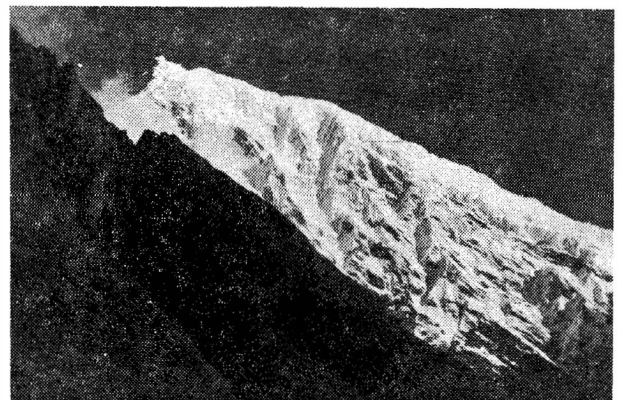
私は5名の調査隊の中で特別のお客扱いをされ、ランタンでの10日間のうち半分を自由に行動することが許された。かくも気のきいた計らいをしてくれた渡辺隊長（極地研教授）に感謝している。渡辺隊長は「ネパールの首都カトマンズで外務省、内務省、共同研究の水文局・トリビューバン大学、日本大使館などリサーチビザ申請のための粘り強い交渉をし、観測地点への荷物(1,500kg)の運搬、ポータ・シェルパ・メイランナー等に関する旅行代理業者との交渉・契約、生活必需品の購入、宿舎の契約、氷河のある標高4,000~5,000 mへの旅行、高度順応など論文には表現されない、いかに多くの仕事があるか」について話された。データ以外の労働は研究ではないという考えをもっておられたのに大いに賛同した。

実験屋のひがみと言われるかも知れないが、フィールド屋には重い荷物を背負い、困難な山道を歩き、雪穴を掘って疲労困ぱいすることを研究と混合している人が多いように思ってきた。肉体が十分疲労することで“やった”という満足感をもたれては困る、良い“データ”をえることに徹すべきである。たとえば、ヘリコプターを使えば、全く疲れず、しかも早く3,800mのベースキャンプへ到達できるし、機械力で雪に穴を掘ることも可能である。フィールドワークの中には金で買える部分の多いことを知るべきであろう。データが得られなければ研究をしないのに等しい。

フィールドで遭遇する現象には、一過性に近く、再現性の少ない現象が多いし、一度帰国すれば再び訪れる機会は事実上ないに等しいであろう。フィールドでは得られたデータをその日のうちに解析し、翌日からの調査へフィードバックさせて疑問を解決し、新しい発見を確かなものにしてゆくことの重要性が高い。

私がフィールドで戸惑うのは複雑な現象が一気に眼前に迫って来て、研究の対象とすべき問題点を抽出したり、それに対処してゆく筋道をどのように立てるかの洞察ができない点である。この点、フィールド屋の勘や洞察力は大したもの、一気に全体を把握し研究の筋道を立ててしまう。私はそういうセンスがフィールドでの何を手がかりに作り上げられてゆくのかを知りたいと思ってきた。

ベースキャンプでの10日間の滞在のうち、半分は高度順応、隊の荷物整理、観測補助、会計報告書の作成に費された。高度順応のために登った山頂からランタンリルン氷河に続く、いくつもの鉢状の丘をもつデブリ氷河に強く引かれた。山頂から真近かに見えるもう一つの氷河、キムジュン氷河はデブリ（岩屑）を全く



ランタンリルン7,234 m(上)とリルン氷河末端(4 km)のデブリをかぶった部分(下)



もたない氷河で、末端は氷河に無数の割れ目が入っており、氷河からのとけ水は一度氷河湖にたまって、そこから流れでていた。

翌日、リルン氷河のサイドモレーン（側堆石）の上まで接近し、デブリ氷河を間近かに見てがく然とした。氷河表面の岩屑はさし渡し50cmから10mにも及び、表面は不規則な凹凸に富んであまりに複雑であった。

一晩悩んだ末、デブリの上を歩いてみることにした。何か研究の対象となる手がかりが得られるかもしれないと思ったからである。弁当持参で、表面が殆んど岩だらけの氷河を縦走し、横断した。鉢状の丘に見えたものは高さが20mもある岩山であった。その岩山と背中合わせに鉢状の窪みがあり、一部の斜面が丘から窪みにつながっていた。この斜面だけは例外的に岩石がなく薄い土砂におおわれ、窪みの底を川が猛烈な勢いで流れていた。河床は氷からできていて鉢の底の部分で水体から顔を出し、再び水体の中へ流れ込んでいた。下流から5つ目の鉢状の丘の山頂には横幅10m、高さ6mの巨大な石が乗っていた。石の底の一部は空洞になっていて水がたまっていたが、手を入れてみると底は氷であった。つまりこの石は氷の丘の上に乗っていたのである。

薄い土砂のついた斜面の内部も氷で、解け水が小さな水路を作って流れていた。斜面の頂部には厚さ1～2mの岩石の層があり、斜面が解けて後退してゆくに連れ、上の岩石は不安定となって斜面をころげ落ち、底を流れる水路に流されてゆく。

高さ20mほどの丘は例外なく、薄い土砂のついた斜面とその底に露出した水路をもって、デブリ氷河

全体が壮大な衰退を続けているという靈感を受けた。デブリ氷河の上端は大きな岩盤によってリルン氷河から切れていた。昔はこの二つの氷河は一続きの氷体となっていたのであろう。

本調査ではランタンの奥にあるヤラ氷河がメインの研究対象であり、二度出かけたが、雨と濃い雲に視界を遮られて氷河に接近することを断念せざるをえなかった。

調査中にナグレを見た。雪煙りを巻き上げて落下する大きなものであった。黒部峡谷では驚異的な破壊力をもつ表層ナグレを10年ほど研究しているが、冬の悪天候と複雑な地形に妨げられて、ナグレの動態は十分解明されていない。そこで、昨年札幌で開かれた国際雪氷学会議の折、ナグレの関係者が集まって黒部のナグレ研究を国際協力で再出発させようということが話題となった。

リルン氷河の巨大な表層ナグレ、滝川君のナグレの写真を見て、雄大な地形に恵まれたヒマラヤこそ黒部峡谷で明らかにしようとしてできなかった表層の高速ナグレ（泡ナグレ）の動態研究の適地であることを発見した。

ナグレはまた氷河の質量収支、動態にも大きな影響をもつであろう。

▶ 筆者は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）により、昭和60年5月29日から昭和60年7月3日までアジア高山地域における比較氷河研究のため、ネパールへ外国出張されましたので、特に寄稿を御依頼したものです。

職 員 消 息

《新任者》

経 理 部

事務補佐員 藤井 優子
(情報処理
センター)

学 生 部

厚生課長 金子 哲夫

人事教授会

- 18日 学部図書委員会
附属幼稚園第1学期終業式
- 19日 学部職業補導委員会
- 20日 附属中学校，附属養護学校第1学期終業式
- 22日 附属小学校第1学期終業式
- 22～25日 幼稚園教育研究集会（於 東京都）
- 23日 夏季休業（～8月31日）
- 24～26日 教員養成実地指導（野外活動）
（於 呉羽少年自然の家）
- 26日 大学院設置準備委員会

経済学部

- 7月8日 財務委員会
学部補導委員会
- 10日 学部教務委員会
拡大教務委員会
人事教授会
日本海経済研究所所員会議
教授会
- 13日 授業終了（14週）
- 15日 教授会
- 19日 学部将来構想検討委員会
- 26日 学部将来構想検討委員会
学部教務委員会（持ち回り）

理学部

- 7月3日 学科主任会議
- 9日 入試改善委員会
- 10日 教授会
人事教授会
- 12日 真率会役員会
- 13日 授業終了（13週）
- 19日 学部教務委員会
- 20日 入試改善委員会
- 29日 次期学部補導委員会委員打合せ会
- 31日 事務連絡会

工学部

- 7月3日 専任教授会
工学研究科委員会
学科主任会議
- 10日 入学試験検討委員会
図書委員会
- 15日 学部教務委員会
- 16日 学部構内交通対策委員会
- 17日 教授会
- 24日 係長連絡会
紀要委員会
図書委員会
- 25日 移転作業実施（第2次分）打合せ会
- 31日 日本工業教育協会理事会，評議員会及び総会（於 北海道大学工学部）

教養部

- 7月3日 教務委員会
予算委員会
特昇その他給与に関する委員会
- 4日 図書委員会
- 9日 教養部施設整備委員会及び同将来計画委員会との合同委員会
- 10日 教務委員会
教授会
授業終了（13週）
- 25日 教務委員会

附属図書館

- 7月15日 係長事務打合せ
- 19日 富士通SEとの打合せ
- 29日 係長事務打合せ

トリチウム科学センター

- 7月12日 第2回運営委員会
- 16日 第3回研究審査専門委員会（持ち回り）

29日 第1回将来計画専門委員会

経営短期大学部

7月10日 財務委員会
 11～14日 経短祭
 18日 教授会
 授業終了(14週)

保健管理センター

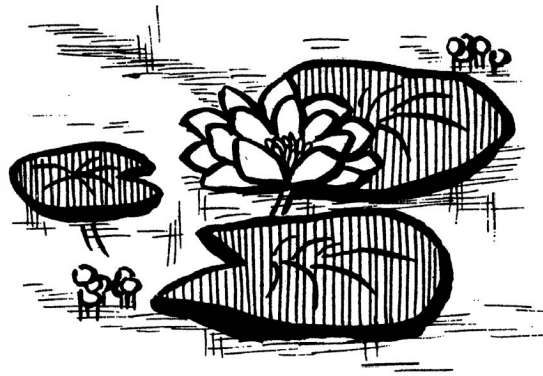
7月5日 耳鼻科検診
 9日 第1回運営委員会
 17日 臨時健康診断(教育学部水泳・登山実習及び体育会オープン登山参加者)

◇訂正(おわび)

学報 昭和60年 7月 1日発行 第260号

ページ	訂正箇所	誤	正
13	富山大学公開講座 21世紀に向かって 教育を考える (講座内容)の表	大塚恵一 <u>工学部教授</u>	大塚恵一 <u>教育学部教授</u>





編 集	富山大学庶務部庶務課 富山市五福3190
印刷所	中央印刷株式会社 富山市下奥井1-4-5 電話 32-6572(代)